

## 第5章

# 訪問国活動の成果



# 訪問国活動

## ねらい

航海中に実施される訪問国活動を通じて、以下の点を学び、身に付けることが期待された。

- 表敬訪問やレセプションなどの公式行事を通して、国際儀礼（プロトコル）を身に付ける。
- ディスカッションのテーマに関連した施設を訪問し、その国での取組について学びを深める。
- 各種施設を訪問し、その地域における文化や歴史、

社会情勢について学びを深める。

- 現地青年との交流を通じ、国際理解を深め、国際親善を図る。

また参加青年は、訪問国活動中、積極的に地元青年と交流を図り、コース・ディスカッションの学びを踏まえて課題別視察に臨み、また、視察先での学びをその後のディスカッションに還元することが期待された。

## ニュージーランド（オークランド）

1日目（2月12日）	
9:00	オークランド港到着
	入国審査
10:30 - 11:00	SWYAA ニュージーランドによるオリエンテーション
11:00 - 14:30	フリータイム
15:00 - 18:00	オラケイ・マラエにてマオリの伝統文化体験
18:30	フリータイム
21:45	帰船
2日目（2月13日）	
9:00	レター・グループ毎にバスに集合
10:00 - 13:00	オークランド市内の学校にて交流 Bグループ：Bairds Mainfreight School C, Dグループ：Ferguson Intermediate School E, F, Hグループ：Koru School I, J, Kグループ：Gladstone Primary School A, Gグループ：Avondale Intermediate School
13:30 - 16:30	オークランド・ドメイン訪問 - 昼食 - オークランド博物館見学 - 園内散策
17:00	帰船
18:30 - 20:30	船上レセプション

3日目(2月14日)	
9:00	コース・ディスカッション毎にバスに集合
10:00	各訪問先での活動 <ul style="list-style-type: none"> <li>- DI コース：ASB North Wharf</li> <li>- DP コース：Mount Roskill Grammar School + Peace Foundation</li> <li>- DRR コース：Auckland Civil Defence Emergency Management</li> <li>- IC コース：Unitec w/ Refugee Youth Action Network</li> <li>- RT コース：Arataki Visitor Centre</li> <li>- YE コース：Youthline</li> </ul>
14:00	フリータイム
16:00	帰船、出国審査
18:00	出航

2月12日、9時にオークランド港に入港すると、既参加青年たちが盛大に船を出迎えた。船内でのオリエンテーションの後、参加青年はフリータイムを楽しみ、午後はオラケイ・マラエにてマオリの伝統文化に触れた。オラケイ・マラエは、ンガティ・ファテウア・キ・オラケイ地域の祖先が祀られ、祖先がそこで生きていると考えられている重要な場所である。参加青年はマラエに到着すると、施設の代表者がマオリ伝統の儀式の説明及び実演を行った。その後、屋内でマオリの歴史や施設の概要に関する説明を受けた。特に、壁や天井を彩る文様が、祖先を表し、歴史がつながっていることを示しているという説明に参加青年は感銘を受けていた。質疑応答では、マオリの現状やマオリ文化保存に関わる施設の意義等について、参加青年から多くの質問が投げかけられた。屋外では、マオリの自然との関わり方やマオリの生活様式の説明を受けた。

参加青年は、マオリの格式高い儀式の様子や、自然との共生を行うマオリの生き方に感銘を受けた。参加青年は、この訪問を通じてマオリの伝統文化に触れ、伝統文化を守り、後世に伝えることの大切さを学んだ。

翌日13日は、レター・グループ毎にオークランド市内の小中学校を訪問した。生徒たちに歌や踊りで迎えられた後、参加青年はグループ毎に用意したパフォーマンスやゲームなどで生徒たちと交流した。訪問先の生徒たちは、参加青年がそれぞれの国の言葉で教える挨拶フレーズを復唱したり、学校の中を案内したりしながら、思い思いの方法で交流を行っていた。

オークランド・ドメインで昼食をとった後は、同じ敷地内にあるオークランド博物館を訪問した。館内はマオリ族の文化・暮らしやニュージーランドの自然について幅広く展示されていた。ニュージーランドの文化や昔の人々の暮らしについてのコーナーに続いて、マオリについてのコーナーがあり、中にはマオリ族の家やカヌー等多くの品が展示されていた。家の中では植物を使ったマ

オリ族の織物工芸が行われ、その装飾の複雑さと美しさに多くの参加青年が興味を持って作業を見ていた。また、前日にオラケイ・マラエ訪問もあったことから、マオリ文化について事前に知識を持ったうえで博物館を見学することができた。博物館の中には戦争についての展示もあり、ニュージーランドだけでなく他の国の資料等も多く扱われ、異なった視点から戦争について考える機会となった。

夜に開催された船上レセプションでは、大熊直人管理官及び横山佳孝在オークランド日本国総領事が挨拶をされた。続いて、参加青年(PY)代表としてコスタリカのナショナル・リーダー(NL)であるアドリアーナ・チャバリア・フローレス氏が挨拶をし、山崎日出男団長より乾杯の発声が行われた。

オークランドでの訪問国活動最終日、参加青年は六つのコース・ディスカッションに分かれて課題別視察を行った。各コース別の活動は以下のとおりである。

■ DI コース：ASB North Wharf

ニュージーランドではASB銀行に施設訪問を行った。ASB銀行は人種、エスニシティ、ジェンダーといったダイバーシティを推進していることで知られているため今回の訪問ではその取組について学ばせていただいた。

施設ではオークランドカウンシルのヘレン・テ・ヒラ氏、ASBを代表してスティーブ・ジャコビッチ氏の2人からのプレゼンテーションがあった。一つ目のプレゼンは主にオークランドにおけるダイバーシティとインクルージョン、特にどのようにマオリの人の意見を地方政治に取り入れるかについての話だった。他にもニュージーランドにおけるマオリとパケハ(ヨーロッパ人)の関係の歴史についての話もあった。そしてこのプレゼンテーションはオークランドという都市は誰もが社会の一員になれる町であるというメッセージと共に締めくくられた。二つ目のプレゼンテーションでは銀行におけるダ

イバーシティとインクルージョンの取組について話を聞くことができた。もちろんインクルーシブな職場を作るのは簡単なことではないが、彼らはダイバーシティが銀行にとって強みや利益をもたらすと感じている。プレゼンテーションの後には ASB で働く社員の方々とお話をする機会があり、もっと会社についての理解が深まりそこで働く社員の方々がどう仕事をしているのかについても学ぶことができた。ASB 銀行にはいくつかのボランティアグループがあり職場の環境をより多様でインクルーシブなものにするための取組をしている。例を挙げると LGBT や職場の男女格差の問題などに取り組んでいるものもあるそうだ。全体を通して彼らは会社の文化を気に入っていてダイバーシティに溢れる環境で働くことを楽しんでいるようだった。

訪問後のセッションでは今回の学びについて振り返り感想をシェアし、ASB 銀行と JAL の共通点や相違点について議論した。ほとんどの人が一致していたのはダイバーシティという点において、ASB 銀行は JAL よりも明らかに先に進んでいるということだった。しかし、日本とニュージーランドが異なる文化や歴史を持っていることを考えればそれほど驚くことでもない。日本は同一性を維持してきた島国であるのに対し、ニュージーランドは原住民であるマオリと様々な国からの移民によって成り立っている国である。つまり、ASB 銀行はニュージーランドの多様な文化を反映しているため JAL よりもダイバーシティに溢れるのは当然でもある。もちろん、日本とニュージーランドは多くの面において文化的に異なるが、このグローバル社会において日本はニュージーランドから学ぶことがたくさんあるだろう。

## ■ DP コース : Mount Roskill Grammar School + Peace Foundation

平和構築のための対話型アプローチコースでの課題別視察の訪問先は、ニュージーランドのオークランドにあるマウント・ロスキル・グラマー・スクール (MRGS) という高校だった。到着するとすぐに、学校の生徒たちがマオリの伝統的な儀式でもてなしてくれた。強く詩的なその歌たちはマオリの文化に根付く愛と敬意の心を表していたように思う。初めの言葉と挨拶の後には、PY と参加生徒たちがペアを組み、簡単な対話を通して一日のアクティビティに備えた。

この日最初のプレゼンテーションはニュージーランドの平和財団によって行われ、核拡散の問題を中心に、ニュージーランドが非核国になるまでの三つの歴史的出来事についての話があった。その三つの出来事ではどれも平和構築及び国内外におけるポジティブな社会変革において対話をもたらす大きな力というものに焦点を当てており、個人が集まって一丸となった熱心なグループが平和的対話を行うことで世界を変えることができることを

全ての PY と参加生徒たちが再確認する機会となった。

ニュージーランドからの参加青年が次のディスカッションを提供した。彼女はマオリ先住民族の土地権利問題と、彼女やマオリの人々が現在直面している課題について、また 150 年間にわたり植民化勢力から彼女の民族が受けてきた暴力について話をした。特に彼女の民族が権利を持つ土地を政府から守ることに関する現在の対立について、詳しく話した。また彼女はオークランド市との対立に勝つために彼女や彼女のコミュニティが行っている平和的対話アプローチについても説明した。そして言語、非言語の対話手法を使用した平和的な抗議または対話だけが唯一のアプローチであること、平和的対話が様々な形を取りうること、また平和的な抗議がポジティブな方法で問題を解決するのに有効でありうることが強調された。

簡単な昼食と参加青年と MRGS の生徒によるインフォーマルな振り返りの後、午後の最後には平和構築のツールとしてのミディエーションを中心としたプレゼンテーションが行われた。簡単なレクチャーと動画から、参加青年はミディエーター (仲裁) という存在が、対話をファシリテートし二つの対立した人々の間に平和的な解決を導くために重要な役割を果たすことができることを学び、またミディエーターが意義のある、平和的な対話のファシリテーションをするために使う様々な手法を知った。また同時に、そこに参加している生徒たちが MRGS でミディエーターとして訓練されていたことも知ることとなった。続いて参加青年と生徒たちが意義深いディスカッションをする機会があり、多くの参加青年は生徒間でのミディエーション・システムに刺激を受け、どうすればこれを各国の教育システムに取り入れられるかについて積極的に話し合った。

MRGS への課題別視察では、対話を取りうる様々な形やそれらをどのように平和的解決へつなげられるかなど、参加青年にとって大きな学びの機会となった。

## ■ DRR コース : Auckland Civil Defence Emergency Management

オークランド市での民間防衛・緊急事態管理センターへの訪問は、本コース・ディスカッションにおいて特筆すべきことのひとつであった。民間防衛・緊急事態管理センターはニュージーランドにおける防災を目的に調整・組織されているうえに、市民にとって親しみやすい雰囲気のある場所だった。参加青年は所長である John Dragicovich 氏及び危機管理アドバイザーの Matthew Bramhall 氏を始めとするスタッフの方々とお会いした。訪問では主に、津波警報への対応を想定した模擬訓練を体験した。参加青年の当日の学びには次のようなものがある。



- コミュニティの防災力（減災力・準備力・対応力・復旧力）を高めることは、災害に立ち向かううえでカギとなる要素である。
- 災害の際、対応の良し悪しを決める最も基礎的な要素は調整にある。
- 災害の前後及び最中の情報共有とコミュニケーションもまた効果的な災害管理を実施するうえで重要である。
- 人々を若年期から防災活動に巻き込んでいくことが、コミュニティにおける持続可能で包括的な防災力を作り上げるうえで重要である。
- コミュニケーションとチームワークは、緊急事態への備えや迅速な対応をするうえで役に立つ。
- 支援の中心にあるのは人間への対応だが、例えばペットといった他の生物に対する配慮もまた重要である。
- 多様な文化的背景に配慮した支援活動が重要である。
- 災害対応では Airbnb といったテクノロジーも活用できる。
- 優先順位をつけ、意思決定を行うことは、災害時の真の課題である。
- 緊急対応スタッフのワーク・ライフ・バランスも無視できない。

参加青年全員が、今回の視察に関して非常に感謝している。各自のコミュニティでも見習って導入されるべき防災の仕組みとして民間防衛・緊急事態管理センターは非常に良いモデルであった。ここでは防災に関する知識を深めただけでなく、現場を想定して防災知識を具体的に活用してみるというシミュレーション訓練を体験できたことが貴重であった。民間防衛・緊急事態管理センターの専門職スタッフからの学びは、非常に示唆に富むものであった。

参加青年の中には、「彼らの仕事にとっても心を動かされた。いつか自分も民間防衛・緊急事態管理センタースタッフのように防災の専門家として働きたい」「民間防衛・緊急事態管理センターへの訪問で、私自身が母国で過去に携わった災害現場での業務を思い出した。スタッフが高い専門性を持ち、よく組織されていることに感心した。」といった感想を述べる者もいた。

#### ■ ICコース：Unitec w/ Refugee Youth Action Network

ニュージーランドを訪れていた間、International cooperation コースのメンバーは Refugee Youth Action Network を訪れた。そこで四つの非政府組織の Green Peace International, Fair Trade, AIESEC, RYAN の話を聞いた。

#### Green Peace

グリーンピースは世界の自然を守る為に活動している。彼らは石油のような自然の原料を過剰に搾取しないように政府や工場にキャンペーンを行っている。彼らは環境に対する物作りの過程の責任について主張している。彼らのキャンペーンは目に見えない世界各国からの支援により成り立っている。しかしながらキャンペーン中の摩擦を防ぐ為に政府や企業の寄付を受け入れることを差し控えた。セッションの間、グリーンピースの成功は国民意識の役割であると常に強調されていた。

#### Fair Trade

フェアトレードとは食品や農業の分野で労働者の権利を促進することである。これらは農家の生活を向上させ、ほかの目に見えない人々の生活を安定させた。フェアトレードは商品の売り上げと作り手の利益を公平に保つことである。これらは農家の商品の最小の値段を見直し、望ましくないトレードの不安定をなくするため農家を孤立させることで改善した。生産者とトレーダーにとって倫理的な労働習慣に従うことと、労働の質の基準を満たすことは義務化されている。従ってフェアトレード商品を購入することは農家が余剰の利益をより良いインフラとツールに投資することを促すことができるのである。つまり主な収入を農業に頼っている発展途上の経済においてフェアトレードの運動は農家の生活を向上させることができるだろう。このディスカッションからフェアトレードが74か国で行うことができるということを理解し、特にニュージーランドはフェアトレード商品を取り扱う人口割合（79パーセント）が最も大きい国であることを学んだ。

#### AIESEC

アイセックは青年交流事業を通して世界中の青年を勇気付けることを促進する国際NGOである。100以上の国に支部を持ち、これまでに70000人以上の青年が参加した。アイセックを通して、青年はリーダーシップ力や自信をつけるボランティアとして働き、外国で勉強する機会を得る。同時に、異なる背景や国籍を持つ同僚と働くことで、異文化経験に浸ることができる。この経験は時に、留学先の生活実態を身近に知る機会となるホームステイによってさらに価値を高める。アイセックにおける最大の課題は、ボランティアによって行われていることで、これによって企画や専門知識に対して困難を生じることがあることである。

#### RYAN

RYANは、ニュージーランドにおける難民の再居住に関して活動を行っている。世界的に難民の数が増加しているため、難民の再居住に関する取組は重要性を増して

いる。RYANは若年世代のためのキャンプや英会話クラス、心理的カウンセリングを通じて、ニュージーランドにおいて難民の再居住についての課題に貢献している。RYANはEngagement, Education, Employment(エンゲージメント、教育、雇用)という三つの活動課題を有している。このような草の根の取組にもかかわらず、1%以下の難民しか再居住の機会を得ることができない。そのため、RYANからの登壇者は、プレゼンテーションの最後にPYに対してこの課題についての意識の醸成、PYの出身国における難民の受入れや支援を呼びかけた。

## ■ RT コース : Arataki Visitor Centre

ニュージーランド・オークランドでは、アラタキビジターセンターを視察し、ディレクターのクリスロング氏と、ニュージーランドの保護管理部門の戦略パートナーシップ(NZ-Doc)のアドバイザーであるジュリーキッドさんからお話を伺った。プレゼンテーションはNZ-Docの歩みから始まった。NZ-Docの歴史を語る上で重要な出来事として、ニュージーランドと先住民のマオリの間で交わされた条約がある。それは、ニュージーランドの3分の1の土地の保護のみではなく、オークランドの周囲の保護エリアに影響を与えるものであった。そのため、マオリのコミュニティを取り巻く協議を行う必要があった。

ジュリーキッドさんによると、責任あるツーリズムの重要な点の一つとして、持続可能な観光を実践するために、ホスト国は第一に観光地が持つ魅力や文化、文化遺産の維持に積極的であるべきという点が指摘された。このメッセージから学んだことは、ゲスト側もホスト側も責任あるツーリズムを実践することが重要であるという点である。またゲスト側は観光地での行動を制限されることを嫌うため、彼女はゲスト側が自発的に行動を起こす必要があると強調した。例として挙げたのは、ニュージーランドでのゴミ問題の解決方法などである。ゲスト側へ“ゴミを捨てるな”と呼びかけるのではなく、“ゴミのない景色を守ろう”と呼びかけることで、ニュージーランドの島々から少しずつゴミを減らしていく方法である。ゲスト側が自発的に問題解決に取り組む姿勢にさせることが重要なのである。

もう一つの重要な問題として、ニュージーランドの原生林であるカウリの腐敗の慢性を防ぐ取組が紹介された。この慢性は、靴についた少量の汚れを含む土から広がった病原菌により、自然のカウリの森林に影響を及ぼ

す。それにより、昨今では菌が広がったエリアへの侵入を減らす多くの努力が行われている。橋が森林の周りに建てられることにより、観光客がその土地に足を踏み入れないことで菌の伝染を防いでいる。この例はカウリの森林の消滅を防ぐためには、ホスト側とゲスト側相互の協力が不可欠であることを示している。ホスト側は将来の為に自然を守るということを認識し、ゲスト側は自分たちが原因を作らないように、訪れる場所を尊重した行動をとらなくてはならない。

次にAuckland Tourism Events and Economic Development(ATEED)のニュージーランドの調査グループの方からお話を伺った。彼はニュージーランド、特に規模の小さい島の観光の経済影響に焦点を当てた調査についてお話をくださった。この発表において重要な点は、旅行で最も費やす費用は、ゲストが旅先に行く前に費やす航空券、宿泊予約そしてツアー費用のゲストの国内での費用だということだ。そこでの主な論点として、発展する観光産業のコンテクストにおいて、持続可能な経済を維持することである。これはゲスト側が旅先でお金を費やすこと、そしてホスト側のコミュニティ内でお金を費やす魅力を確保する方法に関係している。ATEEDの長期間の戦略は経済効果を向上することだけではなく、責任あるホストの行動がその地へ利益をもたらす、最終的にはホスト国のコミュニティの発展を向上することを目的としている。

## ■ YE コース : Youthline

私たちユースエンパワメントコースは各寄港地での課題別視察で既参加青年の力添えによりとても貴重な体験ができた。ニュージーランドではユースラインというメンタリングや勉強を通して選択性を重んじた教育や青年のサポートをすることで青年をエンパワーしている施設を訪問した。私たちが到着した際、マオリ族伝統の“powhiri”という歓迎式で迎えられた。SWY16の既参加者で現ユースライン代表のRamon Narayan、講師と生徒により本日を迎えるに当たっての学校についての説明や教育方法などが伝えられた。その後、YEコースメンバーもユースラインの生徒も二つのグループに分かれ、それぞれにアクティビティを行いながら簡易的に書ける詩を作った。これらの経験からPYは、創造的なコミュニケーションは年齢の制約などなく他者をエンパワーする力を持っていることを体得することができた。

## 参加青年の感想（アンケートより抜粋）

- 皆様の努力、ボランティア、そして素晴らしい受入れに感謝している。この経験は一生忘れない。近い将来、ニュージーランドに行くことを楽しみにしている。(ブラジル)
- 学校の生徒たちはすばらしく、最高の経験をした。ぜひ、カナダの学校とペンパル・プロジェクトを始めたい。(カナダ)
- 博物館ではガイド付きツアーがあれば良かった。(カナダ)
- 先にスケジュールを教えていただき、事前の準備をしたかったが、ともあれ、素晴らしい経験をする事ができた。とても親切で、エネルギーに溢れ、いつも助けてくれた SWYAA に感謝する。彼らの姿に、SWYファミリーを見出すことができた。(コスタリカ)
- 自分のコミュニティでも使えるような教育方法を学んだ。子供たちが自分のアイデンティティ、文化、そしてニュージーランド人であることに誇りを感じていると知った。(コスタリカ)
- ニュージーランドの既参加青年が我々を迎えてくれ、滞在中に案内してくれたことに感動した。(エジプト)
- ニュージーランドはとても多様性のある国である。ほとんどの人々がマオリ文化を尊重していることに感動した。特に、マオリの人々が代々、規則と伝統を守っていることはすばらしい。実際、社会が多様性を寛容に受け入れ、マオリ文化を大切にしていることを感じた。マオリの文化、伝統、言語をもっと勉強しようと考え始めている。(フィジー)
- オラケイ・マラエ訪問で、彼らが文化、アイデンティティ、インフラ、信念、儀式、そしてコミュニティへの所属意識をどれだけ守っているかを知ったのは大きな学びだった。(インド)
- 多くの参加青年はフリータイムが短すぎたと言っているが、この事業は旅行や観光ではないので十分だったと思う。(日本)
- ニュージーランドに行ったことがあるので新しい学びはなかったが、改めて NZ の人たちが文化や自然と密接に共生していると感じた。(日本)
- マオリ文化について深く学んだが、マオリではない人々についてももっと学びたかった。(日本)
- 次の事業 (SWY30) ではホームステイの体験があると良い。直接、対話をする機会が必要と考えており、例え一日か二日であったとしても、我々、青年リーダーにとってホームステイがあることが望ましい。(日本)
- ニュージーランドの伝統について多く学び、ユースライン (青少年団体) の訪問でとても勇気付けられた。人生の中でも思い出深い時間だった。(ケニア)
- フリータイムと活動のバランスが完ぺきだった。自国を皆さんに見せることができ嬉しかった。(ニュージーランド)
- とてもすばらしかった。そして事後活動組織と既参加青年が協力して、私たちの期待以上のことを実施してくれた。(トンガ)
- 学校訪問からの最大の学びは、子供たちに「間違ってもいい」という自由があり、彼らが自由に自己表現をできるということだった。(ウクライナ)

# フィジー (スバ)

1日目 (2月17日)	
14:00	スバ港到着
15:45 - 16:30	青年スポーツ省と SWYAA によるオリエンテーション
17:00 - 18:00	Civic Center にて歓迎セレモニー /NL、SNL、ANL はにっぽん丸船内にて首相表敬
19:00 - 21:00	船上レセプション
2日目 (2月18日)	
9:00	コース・ディスカッション毎にバスに集合
9:30 - 12:30	各訪問先での活動 <ul style="list-style-type: none"> <li>- DI コース: Fiji National Council for Disable Persons</li> <li>- DP コース: University of the South Pacific</li> <li>- DRR コース: Fiji Red Cross Society</li> <li>- IC コース: Japan International Cooperation Agency [JICA]</li> <li>- RT コース: Fiji Museum</li> <li>- YE コース: Parliament of Republic of Fiji</li> </ul>
13:00 - 16:00	フィジー博物館にて昼食後、フリータイム
16:30 - 17:30	船内にて Cultural Night の準備
17:30 - 18:30	夕食
19:00 - 21:00	ボードフォンアリーナにて Cultural Night
21:30	帰船
3日目 (2月19日)	
9:00	バスに集合
9:30 - 15:00	村訪問 <ul style="list-style-type: none"> <li>A, G グループ: Nakini Naitasiri</li> <li>B, H グループ: Nakaulevu Community, Serua</li> <li>C, I グループ: Naganivatu Village, Naitasiri</li> <li>D, J グループ: Sawani Village, Naitasiri</li> <li>E, K グループ: Kasavu Village, Naitasiri</li> <li>F グループ: Galoa Village, Serua</li> </ul>
16:00 - 20:00	フリータイム
20:00	帰船
4日目 (2月20日)	
7:00 - 10:00	フリータイム
10:00	帰船
12:00	出港



2月17日14時、スバへ入港した。入港時、埠頭にてフィジー共和国政府による盛大な歓迎パフォーマンスが披露された。青年スポーツ省と既参加青年によるオリエンテーションの後、参加青年はCivic Centerに移動し、歓迎セレモニーに参加した。会場に到着すると、民族衣装をまとった地元の方々が待っており、小さい貝で作られた首飾りを参加青年一人一人の首にかけた。セレモニーでは、最初に管理官への歓迎の言葉が送られ、フィジーの富の象徴であるくじらの歯で作られた首飾りが贈られた。

その後、女性より衣装を、男性からヤーコン等食料の贈呈がされ、男性たちによる歌と踊りの披露とともに、フィジーの伝統的な飲み物であるカヴァが管理官に振舞われた。ゆっくりとカヴァを飲み干したあと、管理官から感謝の言葉を送り、歓迎セレモニーは終了した。時間が短い中ではあったが、PYはフィジーの伝統及び文化について知る良い機会となった。翌日、参加青年は六つのコース・ディスカッションに分かれて課題別視察を行った。各コース別の活動は以下のとおりである。

#### ■ DIコース：Fiji National Council for Disable Persons

ダイバーシティ&インクルージョンコースは、スバ市の近くに位置するフィジー国立障害者支援機構を訪問する機会を得た。私たちが当施設を訪問したのは、安息日である土曜日であったため、賛美歌が歌われている中で歓迎を受けた。施設のCEOが、私たちとお話をする時間をとってくださり、当施設に関すること及び当施設における日常的な活動に関する説明を頂いた。当施設は、政府により出資がされているが、同時に様々な民間セクターから、様々な寄付を受けている。CEOは、私たちの質問に対し快く回答をしてくださり、障害者とコミュニケーションをとる際には細かなことに気を配る必要があると、繰り返し強調なさっていた。彼は、ときおり障害者に立ったまま話かける人がいるが、障害者は同じ目線で話すことを好むということにも触れられていた。彼はまた、施設のいくつかの異なる部署についてお話くださり、私たちはジムや裁縫センター、教会、教室、そしてパラリンピックセンターといったところに訪問することもできた。当施設は、聴覚障害、視覚障害、精神的・身体的障害といったあらゆる障害者のケアをしている。フィジーには、障害者のロールモデルというべき男性がいる。彼はイリサ・デラナといい、現在青年スポーツ省(Ministry of Youth and Sports)のAssistant Ministerである。彼は、フィジーに初の金メダルをもたらした人で、これは2012年のロンドンオリンピックで成された。SWYの参加青年は、スバの寄港地活動の一環で行われた船上での歓迎レセプションにて、彼と会う機会を得た。当施設のCEOは、彼らは国の政策決定の一部になっていることを嬉しく思うと述べられた。参加青年は当施設

で障害者と会うことはできなかったが、有益な時間を過ごした。我々はまた、政府が広報したカルチャーナイトを見る経験をした。聴覚障害を含む、全ての人々が楽しめた夜であった。そのイベントでは、参加国のプレゼンターが話すときに必ず手話をつけていたからである。もっとも、フィジーは発展途上国であり、向上させなければならない分野もある。そのCEOは、車椅子を手に入れること、病院が遠い多くの人、特に郊外に居住している人に対する対応は、長い道のりであるとも述べられていた。これらは、当施設が取り組もうとしていることでもある。当施設は、助けが必要な人であれば誰でも手を差し伸べ、施設が障害者を学びや職業訓練を通し、自立できるように支援する。この訪問は、参加青年に有名な「障害は無力ではない」という言葉を思い出させた。私たちは皆、世界で平等であり、心に決めたことを何でも行うことができるのだ。フィジー国立障害者支援機構を訪問できたのは実に良い機会であり、私は、私たち皆が、尊敬する各参加国に、何かしら学びを持って帰れるものと確信している。

#### ■ DPコース：University of the South Pacific

「平和構築のための対話型アプローチ」コースの訪問先は、南太平洋大学(USP)だった。到着後、USPの学生は参加青年たちに様々なパフォーマンスを披露してくれた。カバを振る舞う儀式に始まり、フィジー、トンガ、バヌアツなど南太平洋の島々の伝統的な歌やダンスのほか、民族衣装のファッションショーも行われた。これらのパフォーマンスは参加青年を楽しませてくれただけでなく、フィジーの伝統文化をより深く知る機会を与えてくれた。

簡単なそしておいしいスナックをいただき、さらにパフォーマンスを鑑賞したあと、参加青年はUSPのキャンパスで平和構築の手段として対話がいかに用いられているかという内容の講義を受けた。講義では以下の3点が強調された。はじめに、意義のある対話を持つに当たってUSPの学生が様々な問題に直面していることが説明された。それはすなわち言語の壁、南太平洋の文化に特有のおとなしさ、新しいコミュニケーション技術へのアクセスが十分でないことなどである。次に、より意義のある対話が行えるよう大学が提供している様々なソーシャルサービスやプログラムが紹介された。最後に、フィジー人が平和的対話をファシリテートすることの重要性が強調された。これには先住民族とのローカルレベルでの対話や、貿易や経済を支える各国間のグローバルな対話が含まれる。この講義により、参加青年は様々な形の対話及びそれらが持つ機会と課題を知ることができた。

この講義の後には、フィジーとトリニダードの2人のゲストスピーカーから彼らのコミュニティでの先住民族についてのディスカッションを聞いた。先住民族のコ

コミュニティが、過去二世紀にわたる西洋文化による侵害から自分たちの文化や文化的な慣習を守るための様々な課題についてである。このディスカッションにより、参加青年は先住民族たちが現在直面している課題について目を開かれると共に、文化を守るために様々な手法の対話がどのように役に立つかを学んだ。

### ■ DRR コース : Fiji Red Cross Society

フィジー赤十字社への訪問は、とても良い経験であった。スタッフは我々を快く受け入れてくれ、またプレゼンテーションの内容は示唆に富んだものであった。加えて、フィジー赤十字社の事務局長である Filipe Nainoca 氏にお会いする機会にも恵まれ、さらにプログラム担当マネージャの Satareki Vatucawaqa 氏をはじめとするスタッフの方々からお話を伺った。

今回の視察で我々が学んだ重要な要素として、次の点が挙げられる。

- フィジー赤十字社の起源
- フィジー赤十字社の組織構成
- フィジーで起こりうる災害の種類
- フィジー赤十字社の支局
- 災害マネジメントサイクル
- 赤十字社における基本理念
- ネットワーキングの重要性及びフィジー赤十字社の活動にボランティアの力が大きく貢献している
- コミュニティが災害に関して伝統的知恵を持っている
- フィジー赤十字社が人々の自立と回復を目指して努めている
- 2016年サイクロン・ウィンストン発生時におけるフィジー赤十字社の対応
- 災害時に被災者に配られる物資がどのようなものであるか
- 災害後より安全な家を再建することについて書かれたフィジー赤十字社発行の冊子の情報

これらの学びが、コース・ディスカッションで扱われた内容とどのように関連しているのかを考えながら理解することはとても興味深かった。実際、フィジー赤十字社は防災活動を行う組織として理想的な存在であり、我々が現在そして未来において防災分野で活動する上で非常に参考になる内容を学ぶことができた。全体としてこの視察はとても教育的かつ包括的なものであり、フィジーにおける赤十字社の機能を十分に理解することができた。

参加青年の中からは、次のような感想が聞かれた。「フィジー赤十字社への訪問はとても参考になった。特にウィンストン・サイクロン発災時における彼らの実践

的な体験談から学ぶものは多かった。フィジー赤十字社が災害時に緊急支援や復興支援として何をどのように行っているのか、実際に見て知ることができた。また、彼らがどのようなメカニズムで災害に対処しているのかも学んだ。サイクロンの経験から、できるだけ多くの家が災害に耐えられるように、より安全な家を再建することについて啓蒙するフィジー赤十字社が発行した冊子にも感心した。」「フィジー赤十字社で受けた温かい歓迎と気遣いに感動した。また、災害現場での彼らの莫大な仕事量に驚いた。赤十字社の施設を訪問したのは私にとって今回が初めてであったが、地元の赤十字社もぜひ訪問したいと思った。」「フィジー赤十字社の貢献の大きさに感銘を受けたとともに、彼らがいかに地域コミュニティ及び国の政府に対して協力的かということに感心した。」

### ■ ICコース : Japan International Cooperation Agency [JICA]

国際貢献コースグループはスバ市の近くにある日本国際協力機構 (JICA) が支援する二つの施設を訪れた。はじめに、スバ市近くにある村に不純物が取り除かれた水を供給する生物浄化槽 (Ecological Purification System, EPS) を見学した。EPS はフィジー共和国政府が資金提供を行い、JICA 職員によって設置された。この EPS は地域社会によって管理され、JICA 職員によって定期的に監視され、維持されている。

EPS は水を浄化するために自然に発生する微生物の植物相と動物相を使用することを必要とする。山の小川より水が入ってきて、望ましくない有機物質を微生物の分解を通して取り除くため上向き粗ろ過 (Up-flow Roughing Filter, URF) を通る。URF で処理された水はそこから下向きろ過を通る。下向きろ過は一切の残余微量物質を取り除く。村社会で飲用及び調理用に供給されるために、そこから貯水槽に集められる。最終的な水は、村社会に飲用及び調理用として供給されるように貯水槽に集められる。EPS の運転はエネルギーの投入を必要とせず、ほとんど維持管理を必要としない。それにより EPS は島の地域社会で持続可能になっている。

設置された設備は一日で1トンの水を処理し、一人当たり2リットルの飲料に適した水を供給する。合計で50のEPSがフィジーを横断して様々な場所に設置された。しかしながら、これらは飲料に適した水の増加している需要を満たすには不十分である。2000個のEPSが目標にされている。EPS設備を再現するために財源を提供することと熟練した人的資源が重要な課題である。更に時としてサイクロンや気候変動によって引き起こされた洪水といった自然災害により運転が中断することもある。

2か所目の場所ではスバ市の近くのラミ町に作られた市場のコンポストプロジェクトを見学した。ラミ町は固

形ゴミの処理の問題を抱えていた。以前のラミ町では固形ゴミを焼却処理していた。しかしながら、フィジー政府は固形ゴミを焼却処理することの負の影響に気づき、焼却処理による廃棄を禁止した。この規則が後にコンポストプロジェクトを始めることとなるラミ町の市場を補助していた職員にひらめきをもたらした。

コンポストとは自然の作用であり、ゴミをリサイクルする手法の一つである。有機物から利用可能な物質へと変換させる作用であり、土によって分解された結果、生じるものである。たい肥は完全に有機的であり、農業においてとても大切な栄養素を供給する。さらに、コンポストは固形の有機物を環境に無害な形で除去する。固形の廃棄物をコンポストする場合、有機物と再生可能物質とに分解される。そのため、有機廃棄物のみがコンポスト化可能と言える。集められた有機廃棄物は密閉された空間か、掘った穴ないしはビンに詰められ、微生物による自然分解作用の経過を待つ。ときおり、均等な分解を促すために人為的にかき混ぜることもある。その結果、廃棄物の質にもよるが1週間から2週間の後にコンポストができあがる。

ラミ町の市場のコンポストは道路わきの木や花の肥料として使われている。2015年、この事業に技術支援のためにJICAボランティアが派遣された。コンポストの品質を安定させるために、ラミ町政府は近隣の農家に宣伝的に売ることを始めた。昨年、236袋(1袋当たり5kg)のコンポストを販売し、\$708の利益を得た。このように、気候変動対策の一助として、コンポスト事業はこのラミ町政府に持続的な収入をもたらした。近年、ラミ町が直面している最大の課題はゴミの分別と、コンポスト施設運営の継続的な労働力の確保である。

国際協力のもう一つの例がフィジーとキリバスの間で見る事ができた。キリバスは海拔1~2mにある太平洋の島国である。気候変動のために2055年までに海拔30cm上昇し、現在の国土の50~80%が海水に覆われることが予測されている。このことから、キリバス政府は国民のためにフィジー国内の土地を6000エーカー確保した。フィジー国大統領はキリバスを支援することを宣言している。

### ■ RT コース : Fiji Museum

スバでの寄港地活動では、フィジーミュージアムを訪れた。課題別視察の際は、その街におけるフィジーミュージアムの重要性について語ってくれた。また、そのミュージアムのエントランスでお土産を売っている地元の人があった。彼はその工芸品がどのように作られ、また地元の資源がどのように使われているかを説明してくれた。ミュージアムにおいては、我々が訪れた場所の歴史と文化を学ぶことができた。

例えば、太平洋島国間の人々の移動の歴史に関して、

過去から現在に至るまで知ることができた。一つの島国に共生するインド、中国、そして地元のフィジーの人々の文化がどの様に異なるかについても学ぶことができた。興味深いことに、フィジーは第一次世界大戦中に同盟国軍に参加しており、このことは、フィジーと他国の歴史や認識の関係性を示すものであった。

The South Pacific Tourism Organization (以下略SPTO) に所属する Sustainable Tourism Manager の Christina Leala Gale さんからは太平洋諸国における観光戦略についてお話を伺った。太平洋諸国のグローバルな観光事業はオーストラリア・ニュージーランド・アジアの観光客に強く依存しているが、近年ではヨーロッパといった遠い諸国の誘致にも力を入れていることを学んだ。SPTOの太平洋諸国は気候変動の影響を受けやすいと考えている。国土は小さいにもかかわらず、太平洋諸国が受けるリスクは他の大きな国よりも甚大である。SPTOは将来のために彼らの国を守る持続可能な方法でいかに観光客を増やすかに焦点を置かなくてはならない。そのために、彼らはいまだにこの取組の解決策を模索し続けている。それは持続可能な方法で生計を立てていく問題に直面していることを意味する。たとえば太平洋諸国では、観光におけるホストとゲスト両サイドによる他地域への砂浜からの砂の持ち出しや採掘は海岸沿いに人為的浸食と生息地の減少を誘発する。この小さな国での主な論点は、持続的な受入管理能力のない観光業従事者をいかに納得させるかである。そうしなければ、重大な危機になることが予想される。

我々の課題別視察における興味深い側面は我々のコースのテーマが責任あるツーリズムにもかかわらず、多くのペットボトルの水を与えられたことと船からフィジーミュージアムまで距離が近いにもかかわらずバスを使ったことである。このことは、何が責任ある行動なのかという概念は各々の目標によって異なることを指す。ホスト側としての快適な経験を与えるための社会的責任は環境的責任を損なうことを意味する。すなわち、責任あるツーリズムの実践と日々の生活の均衡を保つことが重要であるということである。

### ■ YE コース : Parliament of Republic of Fiji

フィジーで私たちはスバの中心にある国会議事堂を訪れることができた。ここではフィジーの歴史やフィジー政府の改革の歴史を学び、講義の最後にリーダーシップの重要性についてやこの学びを各々の国にどのようにいかせるかなどについて対話することができた。私たちはとても温かいホスピタリティで迎え入れられた。私たちの率直な質問などは事務次長の Jannette Emberson さんによって回答をいただいた。私たちは若いリーダーとして国の政治活動についてこのような環境で学ぶことができたことは大きな意味があると感じた。



YEの課題別視察場所はエンパワメントが行われる全く異なった二つの環境を見せるために選ばれたと感じている。この視察でどのように政策と活動（活動が有効的に作用している時）がユースを社会の一員にしていくことが垣間見えた。さらに、政策活動がユースに直接的な影響を与えることを見ることができた。SWY29参加者の多くがこれらの経験を通しより感性的や知識的に豊かになり、今後この力を最大限に使っていくことだろう。

課題別視察を終え、午後の自由時間を終えると、フィジーの中でも特に規模が大きいVodafone arenaにてカルチャーナイト（交流会）が行われた。Vodafone arenaはおよそ3,000人収容することができる施設で、参加青年が会場に到着した際には大勢の地元住民が観客として来場していた。TVの中継や地元紙からの取材が行われ、道路には今回の訪問を歓迎する横断幕が掲げられるなど、フィジーにおいて本事業が関心の高いものだろうかということができた。国ごとにステージパフォーマンス

が行われ、日本は沖縄民謡やエイサーが披露された。各国が披露する歌やダンスに、会場からは大きな歓声が上がった。フィジー側からもユースバンドによる演奏や伝統的なダンスの披露など今回の活動を心から歓迎する雰囲気が伝わってきた。

滞在3日目には、六つのグループに分かれて村を訪問した。各村では、盛大な歓迎を受け、歌や踊りを披露してもらうなど、参加青年は村の伝統に触れることができた。村でとれた食材を使った昼食や、伝統的な飲み物であるカヴァが振る舞われた。村にある教会を見学したり、食材の調達方法や伝統料理（ロボ）の調理方法を学んだり、スポーツ交流を楽しんだりしながら、村の生活を体験した。村の人の話から、「独自で学校を建て、運営のみ政府から援助してもらっている」、「代々村の移住を繰り返した結果いまの町に落ち着いているが、川の氾濫が原因で今後移住を余儀なくされるかもしれない」などの話を聞き、参加青年はフィジーの村の暮らしを垣間見る機会となった。

## 参加青年の感想（アンケートより抜粋）

- フィジーのホスピタリティ、多文化、そして村の生活について学んだ。しかし、歴史や現在の問題についてもっと知りたかった。（ブラジル）
- スバはすばらしく、人々はとても親切で、友好的で、愛らしい。彼らは人生にもっと感謝し、もう少しペースを落として生きることを教えてくれた。（ブラジル）
- 村訪問は学びが多く、人々の生活が伝統と近代化にどのような影響を受けているかを知って、驚いた。（カナダ）
- SWY29がどのようにメディアに扱われているかを知るのには興味深かった。今後は、人々がメディアに対しての発言には慎重になるように、事前の説明をする方が良いかもしれない。（コスタリカ）
- それほど長時間の滞在ではなかったが、教会に行ったことはあまり楽しめなかった。しかし、今は文化についての理解が深まった。（エジプト）
- 国を出発する前は、フィジーの政治の仕組みについてほとんど知らなかった。この寄港地活動を通して特に政府の仕組みなどについて知識が深まった。（フィジー）
- フィジー政府が活動をきちんと準備し、既参加青年の協力はすばらしかった。フィジーの参加青年たちが彼らの家を訪問させてくれた。彼らと交流し、文化を学んだことが良かった。村訪問をしたことで、彼らが資源の問題などを抱えながらも幸せであることを学んだ。（インド）
- 異文化交流の観点から、フィジーの訪問はハイライトの一つとなった。村を訪問した際に受けた歓迎は、これまで受けたことのないほどのものだった。人々の温かさや本物の愛を受けたことはとても美しい経験となった。自分で旅行しただけでは、本当のフィジーの姿をそこまで見ることはできなかったと思う。「世界青年の船」事業こそがこのような体験をする機会を与えてくれたのだろう。（日本）
- この経験は忘れ難く、私にとってとても重要だった。訪問先を増やし、人々ともっと深い対話ができるように、少人数のグループにすることを提案する。（日本）
- 村訪問からの最大の学びは、人生で最も大切なものはお金では買えないということだ。私が得たのは、友情と本物のホスピタリティであり、彼らの生き方に大変感銘を受けた。（ケニア）
- この事業に対する政府からの多大な支援があることを知った。人々の歓待に心が温まった。フィジーを寄港地を選んでくださったことに感謝している。（ニュージーランド）
- 大変なことを経験したにもかかわらず、フィジーの人々は前向きである。私が訪問した村はいつも深刻な洪水に遭っているが、なんとか生き延びることができている。（トンガ）
- 村の人々の生の生活を見ることができ、課題がありながらも生きる術を自分たちで身に付けていることを自分の目で見られたのが良かった。（ウクライナ）